

ガイドダンスカウンセラーの挑戦 2

教育相談係による コーディネートの実践

鹿児島県公立小学校教諭

そのだみつえ
蘭田満江

毎月のいじめアンケート。自由記述式の小さい紙。ほとんど記述はない。教師たちは「問題なし」と捉える。全児童対象の教育相談。「何か困ったことはない?」「いいえ」「何かあったら言ってね。」「はい」で「相談」は終わる。しかし、いじめや不登校は終わらない。これがすべてではないが、筆者がこれまで勤務してきた学校でよく見かけた光景である。コロナ禍で見えにくくなって、厳しい状況は水面下で依然として続いている。教育相談係としてできることは何だろうか。

1 三次支援中心から 一次・二次支援の充実へ

本県において「教育相談コーディネーター」の指名や配置はこれからの段階である。筆者は生徒指導部内の「教育相談係」として、校内の教育相談体制の構築に取り組んでいる。目的は「いじめ・不登校ゼロの学校づく

くり」である。しかしながら、これまで教育相談係の主な業務は、三次的援助サービスに偏る傾向があった。チーム援助といってもS・C・S・Wとなげば、後は「専門家にお任せ」状態の実態も少なからずあった。

一方で近年、問題対応型の生徒指導から予防的・開発的生徒指導へ、「治す」生徒指導から「育てる」生徒指導への転換が重要視されている（生徒指導提要、二〇一〇）。そこで、筆者は学校心理学の知見を生かし、一次的・二次的援助サービスに比重を置き「いじめ・不登校を起こさない学校づくり」に向けての校内教育相談体制をつくり上げたいと考えている。

2 予防的(二次)支援 ーアセスメントの活用ー

予防的教育相談として、苦戦している子どもの早期発見と早期対応のために情報の共有

を複数のアセスメントで多角的に実施している。年二回(五月と十月)実施で、全教職員による変容の検証と共有を行う。筆者はその企画と実施・入力と分析までを担った。使用したアセスメントは、①「Q-Uアンケート」②「学校楽しいーと」(鹿児島県総合教育センター開発)③「教研式学力検査NRT」である。「Q-Uアンケート」では、学級集団の状況及びヘルプサイン・ネガティブチェックで気になる児童を抽出・集約し、全教職員で複眼的に共有することで早期対応につなぐことができた。学級満足度尺度は教研式学力検査NRTとクロス集計し、学習場面での支援方法を探った。「学校楽しいーと」では、一人一人の適応感をより細やかに「友達との関係」「教師との関係」「学習意欲」「自己肯定感」「心身の状態」「学級集団における適応感」の観点から把握し、リーダーチャートから個人内で相対的に強いストロングポイントにも注目した。これらの結果は、教育相談(六月全児童・十一月全保護者対象)の資料として活用した。相談では課題の改善や追及ではなく、アセスメントから見えてきた子どもの強み(リソース)に触れ、自己肯定感を高めながら解決志向とカウンセリングマインドで実施することを確認した。担任からも、教育相談の雰囲気は親和的になり、子どもや保護者との関係性が好転した、相談の目的が明確に

なり焦点化した内容になったと高評価の声が聞かれた。

また、一連の入力と分析を教育相談係が行い担任と結果を共有することで、より迅速な集約が可能となり、即時的な対応につながった。係が行う本来の目的は、分析を依頼する費用の削減と多忙を極める担任業務を補うことだったが、この作業を通して学校全体を俯瞰でき、傾向や課題を発信できるメリットが生まれた。なかには、何度も書き直して消しゴムの跡が残る回答や書きなぐったような筆跡の質問紙などがあり、数字には表れない揺れる気持ちや小さなサインを教職員と共有することで、支援の糸口につながったこともあった。この作業は、勤務校が小規模校（八十名程度）であったことと、筆者が通常学級担任でなく時間的確保や校務上の配慮があった点が大きい。大規模校でも教育相談部の役割を明確化して、チームで対応するなど工夫により実施は可能であると考えられる。

3 開発的(一次)支援 —コロナ禍集団不安—

すべての子どもを対象とした開発的支援として構成的グループエンカウンター（以下、SGE）を全校で実施した。担任が学級で行うショートエクササイズの継続的実践や長期休業明けの全校SGE（コロナ禍で上学年・

下学年に分散して実施）の年間プログラムを作成し実施した。その際、QIUアンケートや学校らしいーとの結果を参考に、個々の学級集団の状況やねらいに合わせて、活動内容を担任と選定した。また、感染症対策として身体接触を避けたり、非言語で活動したりするエクササイズを各学級で実施できるように「感染症対策を考慮したエクササイズ集」を作成し、全教職員に配布した。実施に不安がある場合は、筆者が相談にのったり、リーダーを務めたりしながら実践を進めた。職員研修でも実際にエクササイズを体験してもらうことで実施への抵抗を軽減するとともに、SGEのよさも体験してもらった。SGE体験を重ねることで職員間のリレーションや自己理解が促進され、同僚性が高まったことは職員集団の関係性に大きなプラス面となった。

4 人と人をつなぐ教育相談 —教職員の関係性—

子どもの関係をよくするためには、子どもをとりまく教職員の関係も良好であることは必須である。日頃から雑談や相談など語り合える職員集団があると、問題が発生しても原因追及ではなく、解決志向で「そこから何をともに学ぶか」という失敗を責めない支持的風土が生まれてくる。苦戦している先生、頑張っている先生方の取り組みをカウンセリン

グマインドでねぎらい支える間接的な支援や教職員間の関係づくりも教育相談係の大切な役割ではないかと考えている。

この取り組みを始めて数年が経つ。当初はアセスメント結果の共有に対して強い抵抗が多かった。学級担任制の小学校では、教職経験が長い・学級経営に自負がある、または逆に不安がある場合、介入されたり、オープンにされたりすることを避ける傾向が強い。特に人事評価に反映される懸念が情報共有をさらに難しくさせる。この点は、管理職の経営方針やリーダーシップが大きく影響する。今後、教育相談担当がコーディネーターとして効果的に機能していくためには、立場や役割の明確化・時間的配慮・活動内容等の条件整備がなされた上で、個々の学校の実情に応じた体制構築が必要とされるだろう。

コロナ禍で「つながり」が制限される状況は長期戦になるかもしれない。だからこそ、子どもと子ども・子どもと教師・教師と教師・保護者と教師・外部機関と学校等々、人と人を温かくつなぐ教育相談係のコーディネート力は期待されるのではないだろうか。

引用文献

- ・石隈利紀『学校心理学』誠信書房、一九九九年。
- ・笠井孝久『教育相談コーディネーターの機能と役割』千葉大学教育学部研究紀要、第六十七巻、二〇一九年、六三―六四頁。